

樹齢1000年以上、圧巻の巨樹

神善寺の門をくぐると目に飛び込んでくる波崎の大タブ。これでもかと大地にどっしりと腰を据えた迫力ある根元と、幹周りに圧倒されます。見上げれば、太い枝が空を覆うように張り巡らされ、「これが本当に一本の木なのだろうか」と驚くばかり。枝の一本一本も、まるで大木の幹ほどの太さがあり、重力に逆らって横へと張り出しているような不思議な感覚に包まれます。この見事な巨樹を、数歩離れてみたり、ぐるりと周り込んでみたりしながら眺めていると、時の経つのも忘れてしまうほどです。

樹齢は推定1000年以上、幹周り約8・1メートル、高さは約15メートル。昭和35年に茨城県の天然記念物に指定され、平成2年には新日本名木100選にも選ばれました。ちなみに「巨樹」とは、地上から1・3メートル以上の位置で幹の円周が3メートル以上ある樹木のこと。これは昭和63年、環境庁(当時)が初めて全国規模で巨樹・巨木調査を行なった際に定められた基準です。まさしく波崎の大タブは県内最大、全国でも有数の「巨樹」といえます。

の「巨樹」といえます。神善寺と大タブの歴史

今回は、大タブの歴史や言い伝え、地域の皆さんとの関わりなどについて話を聞くため、波崎の舎利地区にある神善寺を訪ねました。寺の歴史は古く、平安時代の天喜4(1056)年、高野山から貞祐上人が十六善神の宝物をもって開山したと伝わりま



木造釈迦涅槃像

す。県指定有形文化財の木造釈迦涅槃像、木造大日如来座像をはじめ、市指定有形文化財の釈迦堂、紙本両界曼陀羅、木造地藏菩薩立像、一石宝篋印塔、木版刷大般若波羅蜜多經600巻などを有する由緒ある寺です。

「寺の歴史より、大タブの方が古いですよ。この地に寺が建つ前から

タブノキがありました。長い間、地域のシンボルとして皆さんに愛され、よりどころとなってきた大切な木です」と住職の中山照仁さんが話してくれました。

昔は寺の境内は子どもたちの遊び場になっており、大タブの周りを元気に駆け回っていたようです。地域の皆さんの思い出の風景には、時代を超えてこの大タブの姿があることでしょう。

### 「火伏せの木」と護摩焚き

波崎の大タブは、別名「火伏せの木」とも呼ばれています。その由来を中山住職に聞きました。

「江戸時代にこの辺りで大きな火災がありました。大タブが火を食い止めてくれて、本堂が延焼せずになりました。それにあやかり本堂で火伏せの護摩を焚き、家内安全を祈願するようになった経緯があります。



木を見守るように並び石仏

また、戦時中にも空襲による火災を防いでくれたことがあったと聞いています。昔の本堂は木造でしたので、もし大タブが守ってくれなかったら火の回りが早かったと思われま

す。火伏せの護摩焚きは約50年前まで、長年受け継がれてきました」

タブノキは常緑広葉樹であり、火に強い木とされています。潮風にも耐えるため波崎の地にしっかりと根を張り、1000年にわたって地域を守ってくれたよう

です。大タブを拝むお大師様

次に質問したのは、大タブの根元

◆まちの魅力再発見◆

特集

# 大波崎の大タブの

樹齢1000年のストーリー

神善寺の境内で圧倒的な存在感を誇る波崎の大タブ。「火伏せの木」という別名、木の周りを囲む約60体もの石仏、幹を覆う巨大なコブなどさまざまな謎をひも解きながら、地域のシンボルであり続けてきた巨樹に迫ります。

木造大日如来座像



樹齢1000年を超える巨樹・波崎の大タブ